

中南米

明治時代から日本人の移住を受け入れた中南米。初めて隊員が赴任したのは1968年、エル・サルヴァドルであった。以来、多くの隊員たちがこの地を訪れ協力活動を進めている。その歩みは堅実に、各国の人々と協力活動の中に数々の成果をもたらした。その後、協力の形態も変化しながら段階も進み、中南米でもいくつかのプロジェクトが運営されている。コスタ・リカの「有機農業技術普及プロジェクト」、パラグアイ「野菜消費拡大プロジェクト」、そしてドミニカ共和国のNGO「子供の家」を中心とした教育指導グループ、隊員たちは多くの人々の期待に精一杯応えていた。



メキシコ
1993年派遣開始



グアテマラ
1989年派遣開始



エル・サルヴァドル
1968年派遣開始



ホンデュラス
1976年派遣開始



ニカラグア
1991年派遣開始



コスタ・リカ
1974年派遣開始



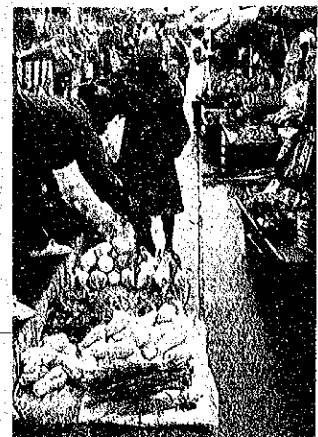
パナマ
1991年派遣開始



エクアドル
1991年派遣開始



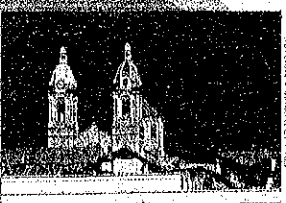
ドミニカ共和国
1985年派遣開始



セント・ルシア
1995年派遣開始



ジャマイカ
1989年派遣開始



コロンビア
1985年派遣開始



パラグアイ
1978年派遣開始



ベルギー
1990年派遣開始 現在、派遣中断中



ボリビア
1978年派遣開始

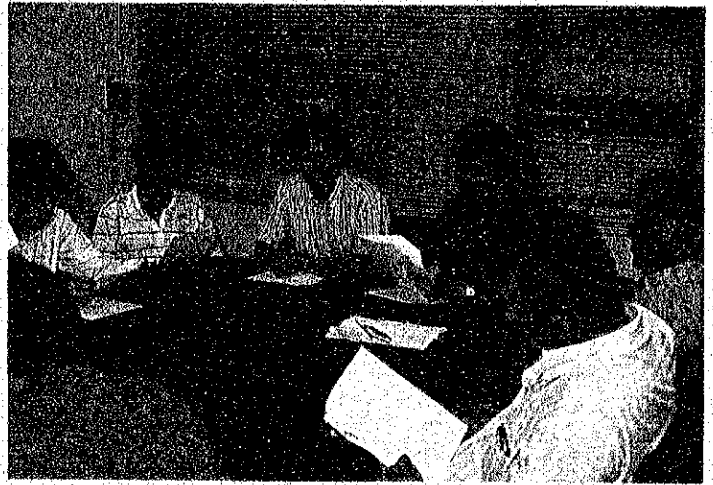
農業の危機を救う 「有機農業技術普及プロジェクト」 の意義は大きい

コスタ・リカの農業において、いくつかの問題が発生した。

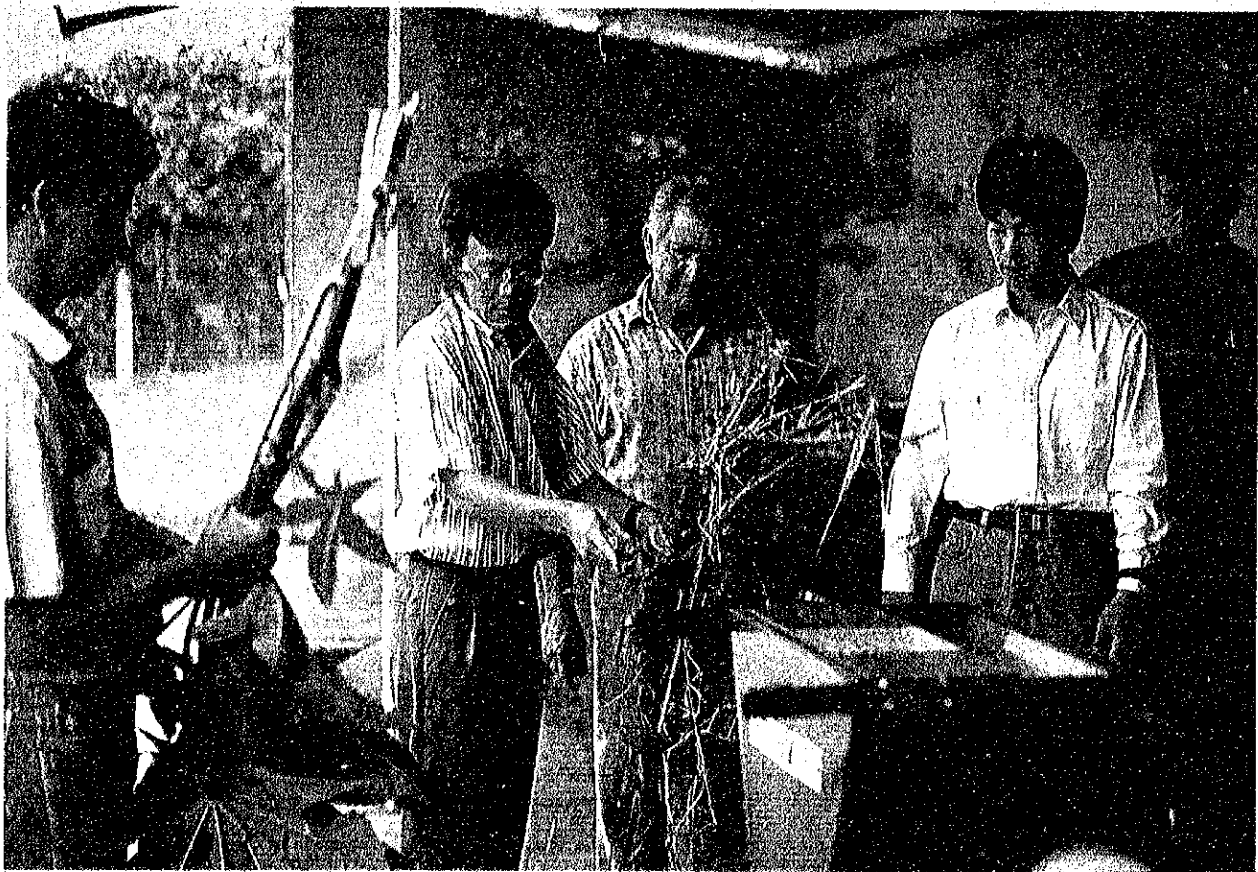
まず、コーヒー、サトウキビなどの加工過程で発生した農業廃棄物が河川に流入し、汚染が社会問題になっていること。そして農民の不十分な知識から乱用された農薬、化学肥料により、農業地帯で地方の低下が起こり、表土流失、病害虫の多発、生産コストの上昇、農産物の成育不良、さらに農民、消費者の健康被害と、これも社会問題にまで発展している。

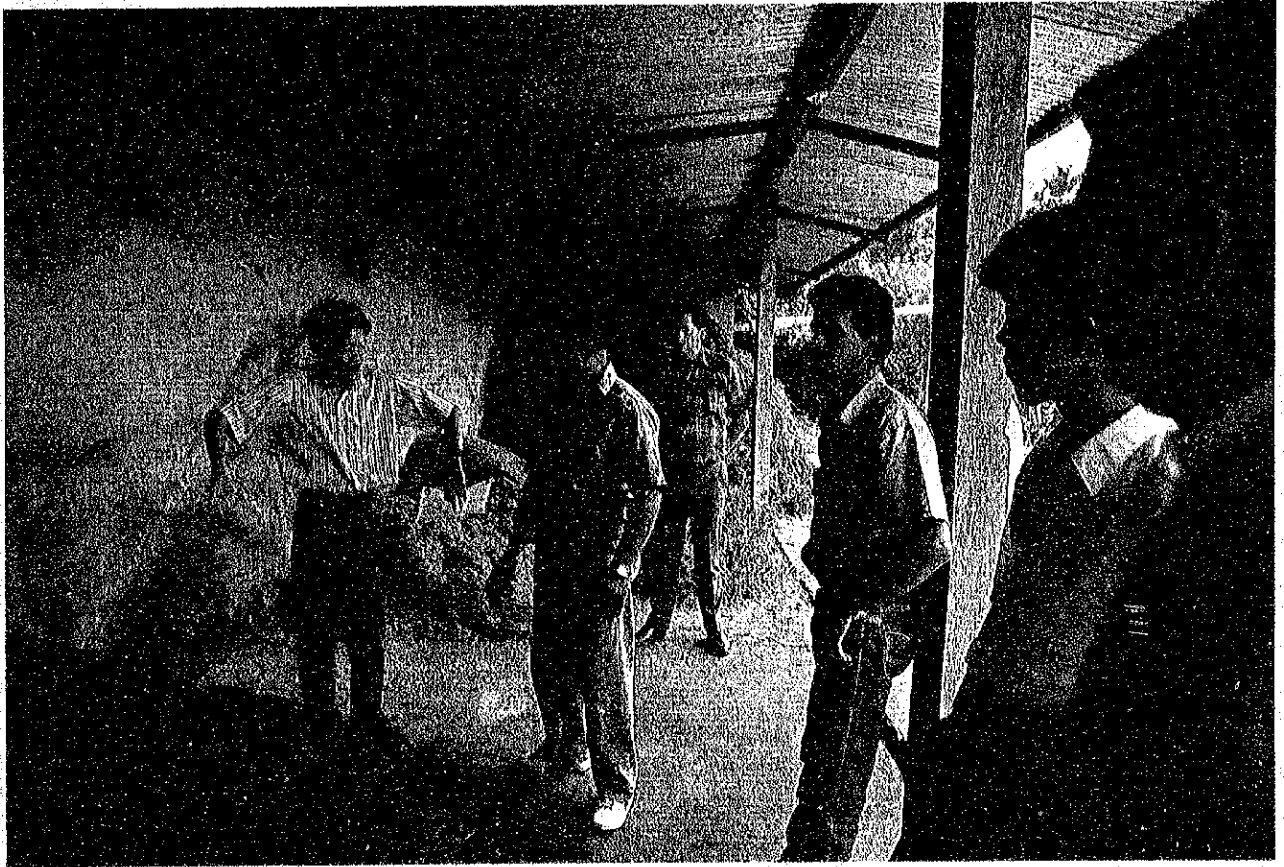
1993年、コスタ・リカ大学農学部で開始されたグループ派遣「有機農業技術普及プロジェクト」は、コスタ・リカ国内において多くの関心を集め、農業関係者を中心に多くの問い合わせや技術指導の申込み、相談を受けている。

現在、このプロジェクトに寄せられている期待と使命を念頭に、更なる可能性を追求する活動が続けられている。



「有機農業技術普及プロジェクト」の中心となって活躍している佐々木正吾シニア隊員。今日も多忙な一日が始まる。(上) コスタ・リカ国内に4つあるモデル地区の担当者との、3カ月に一度開かれる会議。会議室を出た後は堆肥舎での縮断機を使った堆肥作りと有機質肥料作り、温室でのピーマン、トマト、キュウリの苗作りの指導、精力的な彼の仕事はまだまだ続いていた。







「有機農業技術普及プロジェクト」メンバーの一員でもある土壌肥料の山田明徳氏が、村人とトウモロコシの生育調査中。比較的丈夫な作物とされるトウモロコシも雨季には病気が多いという。(右) 村人たちと堆肥舎にて有機質肥料のポカシ肥の状態を調べる。これ以外にも土壌分析のためのサンプル採取、一般農家向けの土壌知識についての基本マニュアル作りと多忙な毎日だ



村落開発普及員としてマタンブー・インディヘナ小規模農業者協会へ派遣されている井出嘉也隊員。「有機農業技術普及プロジェクト」を参考に、独自にボカシ肥を作る堆肥舎を下宿先の大家さんと建てる。(上) 村人たちと小豆の播種作業。(右下) 作業の後の昼食はまた格別おいしい



見事なコスタ・リカの園の木、グアナカステ

ドミニカ共和国

あの子の名前は？ 子供たちは 何人来ているのだろうか？ 「子供の家」で、今日も 隊員たちの一日が始まった

小学校には体育の授業がなかった。まず、運動場の建設から始めなければならない。

協力隊員の多くは、派遣国の公務員として勤務する。しかし、このドミニカ共和国においては、NGOである東部福祉慈善団体が、隊員による支援の輪がひろがっている。この東部福祉慈善団体には、「子供の家」として幼稚園、小学校、専門学校があり、さらに付属して職業訓練所もある。

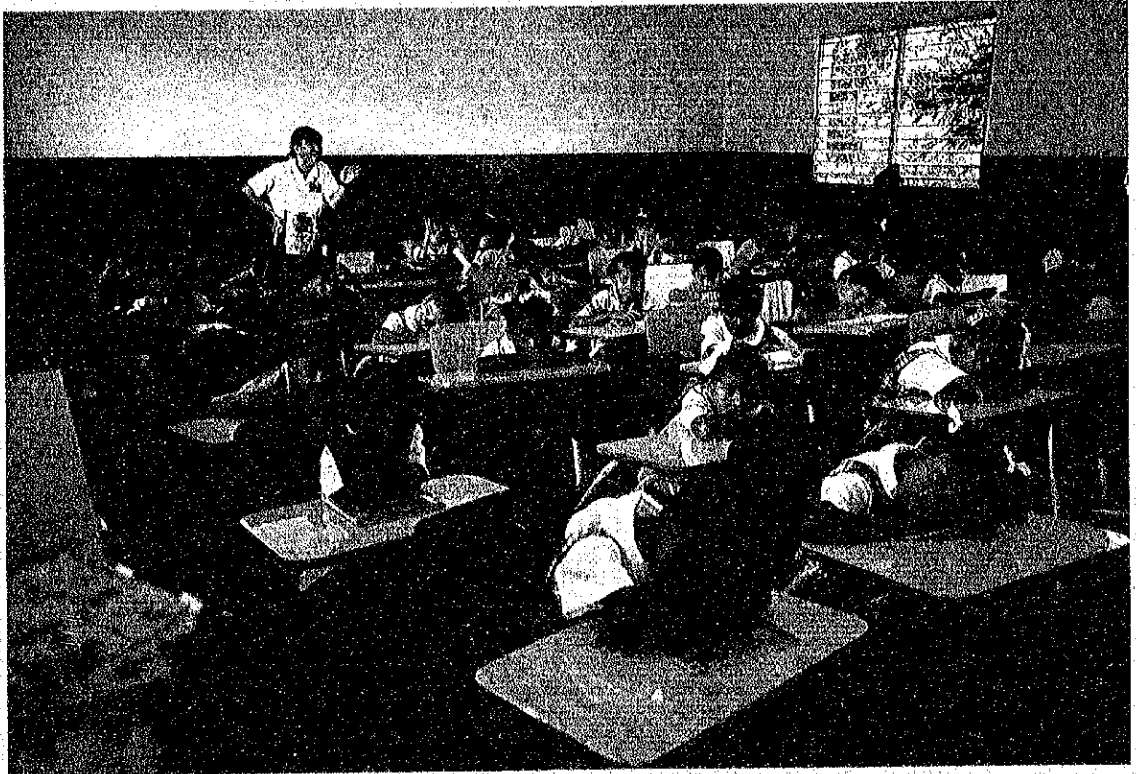
この国の将来を担う子供たちに直接触れる隊員たちの志は高い。教育の現場には、当然あるべきものが不足していた。それは現地の先生への啓蒙であったり、物品、カリキュラムであったり、質、量ともに、一から隊員たちが取り組まなければならないことばかりであった。こんな中、子供たちの成長に彼らは熱い眼差しを今日も送っている。

立派なバスケットボールコートまで揃った運動場で、今、子供たちは思い切り走りつづけている。



今日も「子供の家」に響くのは、鈴木美千代隊員の明るい声だ。0～1歳児のクラスを受け持つ彼女は、当初の幼稚園教師の仕事に限らず、子供たちの健康状態をチェックしたり、一緒に働く保母さんたちに、赤ちゃんに接する知識や玩具の作り方、与え方、家庭との連絡についての指導などもするのでいつも大忙し。どんな時もスキンシップを心掛け、隊員の腕に抱かれた子供たちは健やかな顔ばかりだ





小学校教諭として1年生の授業をする松田みゆき隊員。1年生といっても、進級できなかった子供や、今まで教育を受けていなかった年長の子供もまじる60人の大クラスだ。今何が大切なのか、自分に何ができるのかを、いつも冷静に見極めたいという彼女は、ひとりでも多く、学ぶことの素晴らしさ、楽しさを知り、夢を持ってくれたらと、子供たちの心に響く授業を展開している



「子供の家」で活動する幼稚園教諭の筒井美幸隊員。子供たちの安全を見守りながら、世話をする保母さんたちの様子も同時に見つめている。この園には学校の授業の中に美術や音楽の授業がない。だからまず彼女たちに、創る喜び、歌う喜び、遊ぶ楽しさを実感してもらい、それを子供たちに伝えられるよう指導している

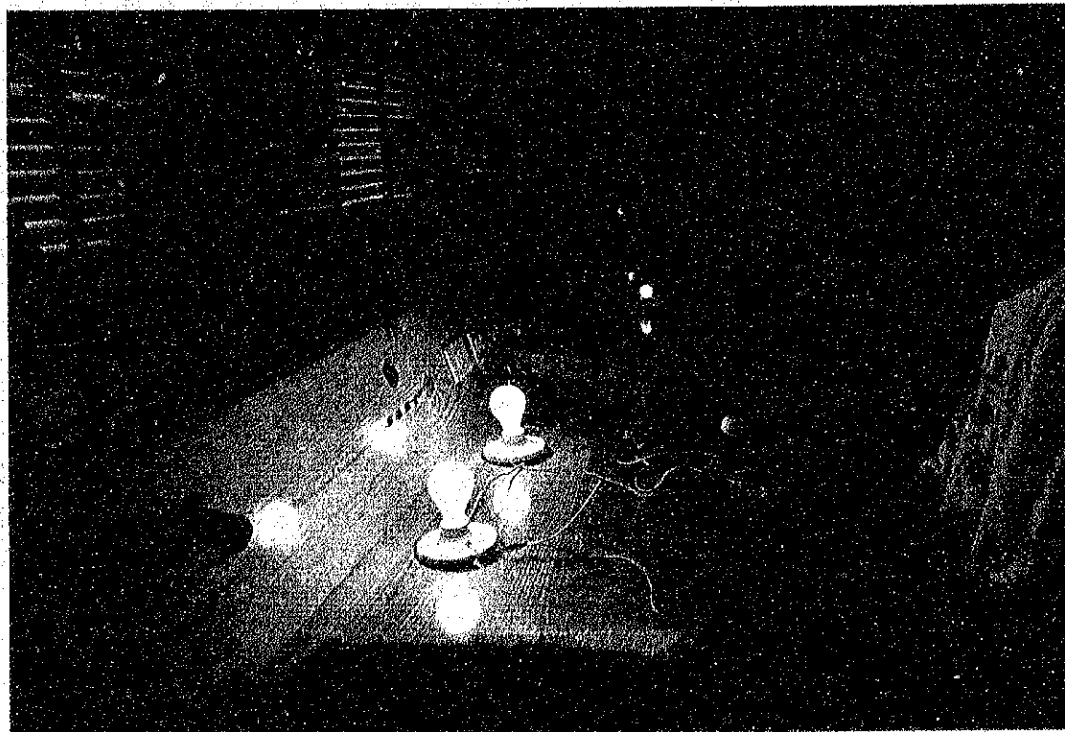
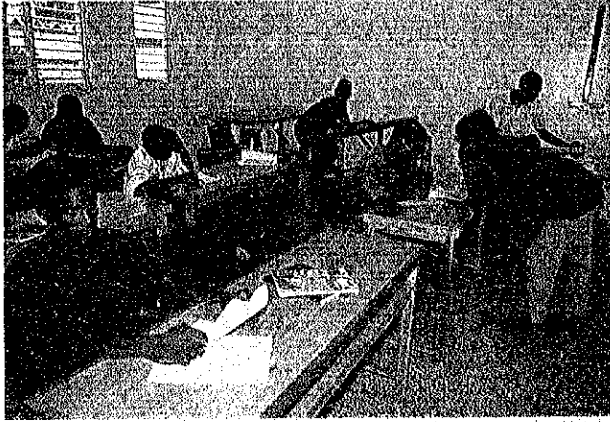
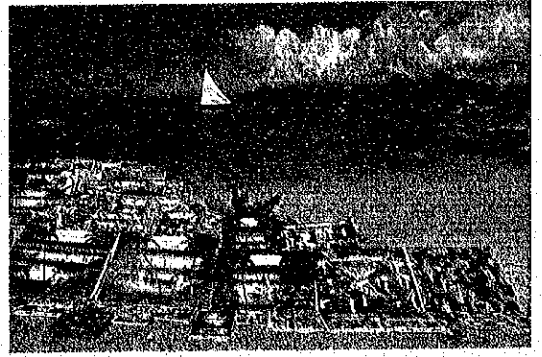


「子供の家」にある聾学校で発話訓練指導に熱の入る青少年活動の佐々木隆典隊員。補助器を使用しないこの国の聾児に言語指導をすることは、真に心と心の触れ合いそのものだ。子供たちの熱い眼差しに、心を動かされることもあったと隊員はいう。2年前には運動場が完成し、体育の授業もできるようになった「子供の家」では、ハンディに負けない底力に明るい子供たちの声が一瞬中絶することがない



「子供の家」の職業訓練所で、電気工事技術者の助手の育成にあ
たっているのは榎田淳隊員。授業では実際に配線をして電球に明
かりがともるまでを生徒たちに見せた後、自らやってもらっ実践
的な指導をする。もちろん、成果を試すテストもあるが、質疑応
答は自由で、先生から親切に教えてもらえるテストだ

本物のカリブ海パジャイベ
海岸をバックに海岸のみや
げ屋が絵をひろげている



カメラマンノート ④

山田芳久

今回の取材は、コスタ・リカ、ドミニカ共和国、パラグアイの3
カ国。どの国の隊員たちも元気印で、取材は充実していた。

なかでも最後のパラグアイ。素朴。純真。この国の田舎の人々
には感激してしまう。優しいこと限りなし。自然に包まれ、マテ
茶を飲んで仕事に精を出す。客に対しては殊の外親切だ。物質
文明からは遠い距離にあるが、何でも心豊かな人々。

人間にとって大切なものが何なのかが教えられる。人を思いや
り、動植物を愛し、人間の歩幅で歩いて行けば、人は優しい心で
結び合えるのかも知れない。そうすれば地球は、いつまでも素敵
な星でいられるような気がする。お金で買えないものはなぜか、
みんなささやかだけれど、いつも少しだけキラッと光り輝いてい
る。

「マテ茶をどうぞ」、また背中で優しい声がする。

パラグアイ

農業の発展と栄養教育の普及 「野菜消費拡大プロジェクト」には 多面的な期待が寄せられている

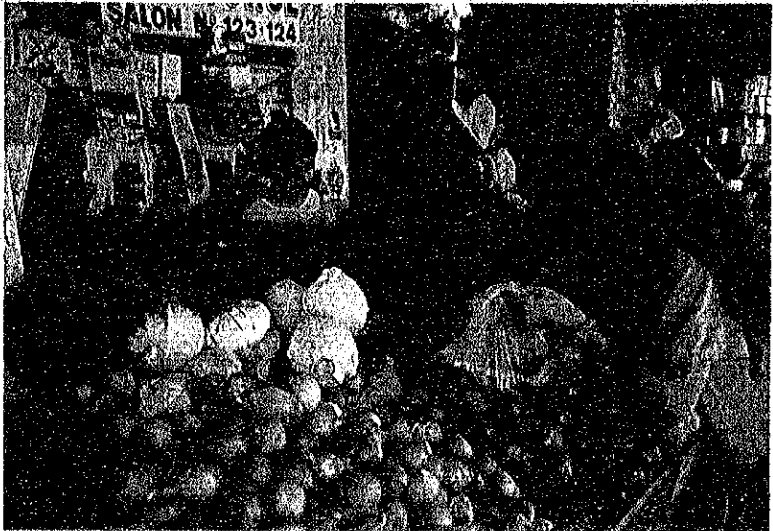
野菜をなぜ食べなければいけないのか？ 食べるとどう
いう効果があるのか？ どういう料理方法があるのか？

1992年、パラグアイで「野菜消費拡大プロジェクト」
が家政、野菜隊員により開始された。この国では長年肉
を主にした食事が多く、野菜が加わってからの歴史は浅
い。一般家庭、特に農村部での食生活にはまだ、定着し
ていない。栄養知識の不足、とりわけ野菜摂取による疾
病予防への効果は、まだあまりよく知られていないのが
現状である。

だが、人々の健康や栄養に対する関心は年々
高まりをみせ、野菜が将来的に安定した作物と
なることは確実である。さらに輸出用作物とし
ての野菜栽培への期待も大きい。

農業の発展と栄養教育の普及というふたつの
側面から、野菜消費の習慣をさらに広めること
が、生活向上と健康の維持につながっていく。

隊員たちによる講習会は年々増え、よりこま
やかな眼くばりが出来る栄養指導をするために、
最近では看護婦隊員との協力で健康診断も加わった。
大きく広がりつつあるこのプロジェクトの
新たな展開が待たれる。



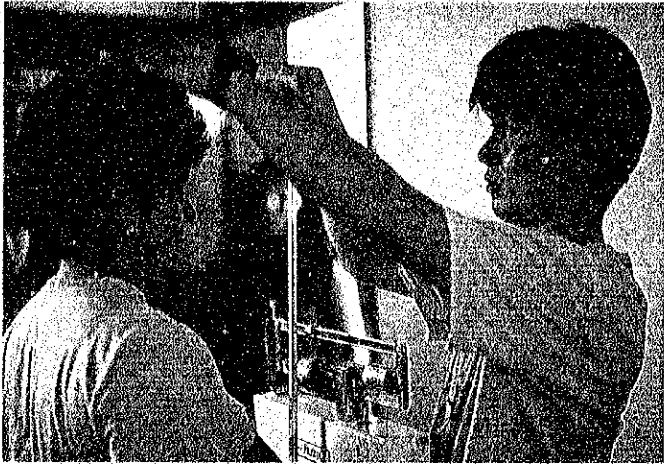
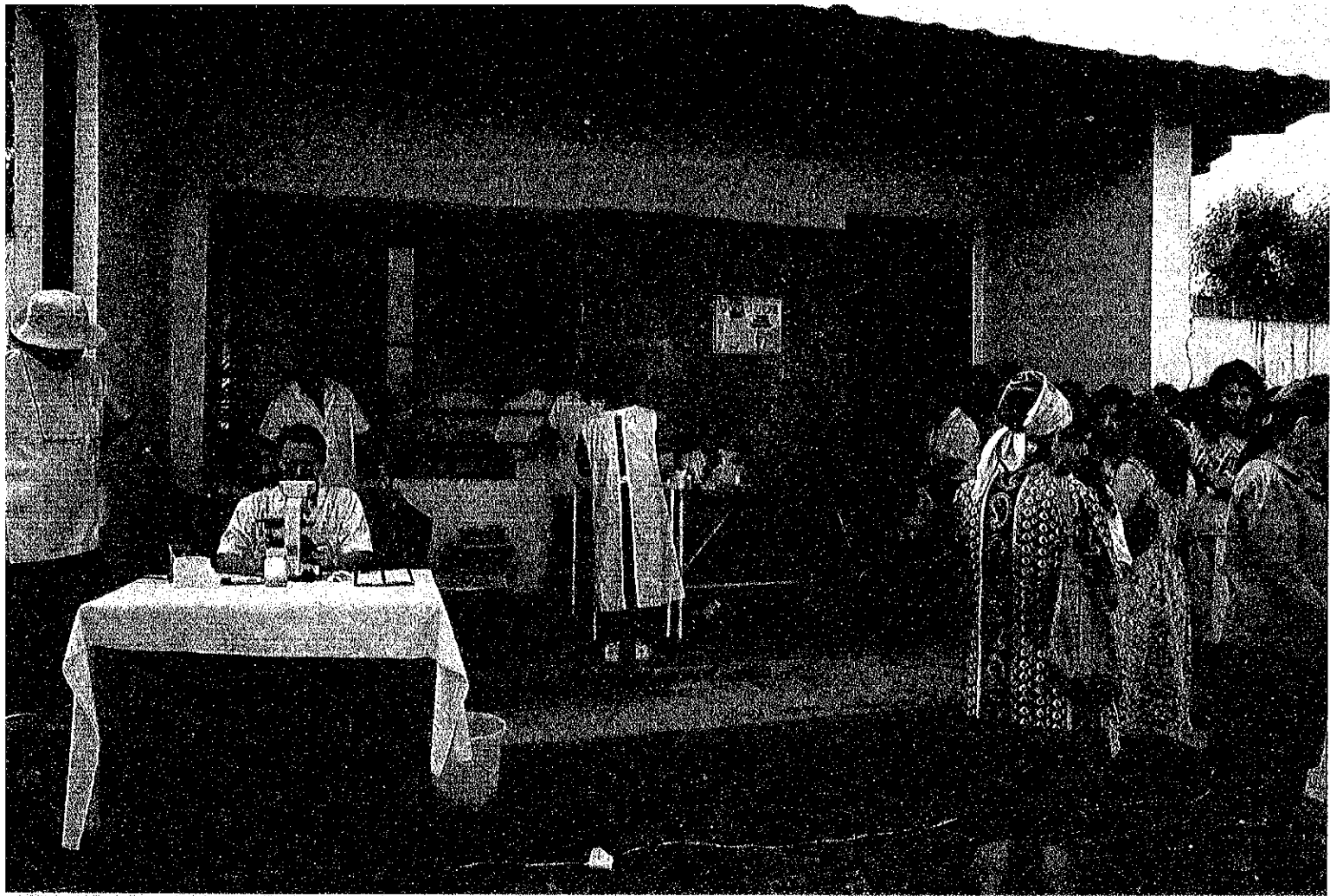


この日は、キュウリ、大根、ちんげん菜を使った料理実習がおこなわれた。家政の藤掛洋子隊員が口にする惣菜、手にする野菜、すべてを見逃さないよう、村の婦人たちは真剣に料理に挑んでいる。少しずつではあるがこの「野菜消費拡大プロジェクト」により村人たちは野菜料理をおぼえ、家庭で食べ始め、市場で手にすることができない時は、自ら家庭菜園で野菜を作り、食卓に加えるようになった。(前頁上) 講習会用の食材になる新鮮な野菜をオビエド市場で買う。(上) 編物の指導をする隊員。教わるのは彼女の愛弟子ドミンガさん



生活改善の普及を効果的におこなうため、農村の人々を対象に野菜消費拡大の講習会と合わせて集団検診もおこなう。栄養指導のほか、高血圧の防止や公衆衛生についても指導する。村人たちはこのような講習会を特別なイベントのように思っていて、大人も子供もオシャレをしてやって来る。(左) パラグアイのハーブ、アルパの演奏を聞きながら昼食をとる隊員。(下) グァビラ村の人たちにキュウリ栽培の指導をする豊丸健一隊員の講習は熱が入る





「野菜消費拡大プロジェクト」と並行して行われる集団検診。(上) 行列を作り検診会場の前で待つジュトラ村の人々。(右) 看護士の北野進隆は血圧測定を担当。(左上) 野菜栽培の高井博規隊員も今日は村人たちの身長を測定する



村人が「おうむの口ばし」と呼ぶロストラータ